

# 猿新聞

編集責任者  
山村 準  
tel:0595-63-1725  
Email  
jyun.y@asint.jp  
名張鳥獣害問題連絡会  
発行部数  
【全戸回覧】  
錦生地区：100部  
赤目地区：150部  
箕曲地区：70部  
ひなち地区：220部  
つつじが丘：430部  
【全戸配布】  
国津地区：380部  
市民センター：90部  
(9地区)  
名張市議会：20部  
名張市役所：30部

## 人類の危機！ 新型コロナ・蝗害！

温暖化の進行は、新たな感染症の発生や拡散に  
関連があるとも言われています。新型コロナと、  
ほぼ時を同じくして始まった、コロナに続くもう  
一つの危機といわれる蝗害。これも、その背景に  
地球温暖化の影響があることが示唆されています。  
若者たちの未来に、もうこれ以上、禍根を残し  
てはいけません。

(蝗害＝バッタによる農作物被害)

今、世界は新型コロナ  
ウイルスが蔓延し、  
その被害が加速度的に  
広がっています。  
新型コロナウィルスは、  
コウモリ由来のウイル  
スであるとコウモリが  
疑われています。しか  
し、地球温暖化による  
高温・多雨など異常気  
象が元凶にあることが  
示唆されています。

近年、野生動物が激  
増し動物側から人間社  
会に近づき人に接触す  
る機会が多く、ネズミ  
などは都市部を棲家と  
して増殖し感染症を媒  
介しています。  
感染症を防ぐために  
は、身近な野生動物が  
どのような病原体を持  
っているのか、よく知っ  
ておく必要があります。  
基本的に野生動物は清  
潔なものではないと理

### 地球温暖化を招くアマゾン 流域の大火災。

写真＝WWFジャパンHPより引用



染源である動物から  
直接人間にうつる直  
接伝播と、感染源で  
ある動物と人間との  
間に何らかの媒介物  
が存在する間接伝播の、  
大きく2つに分けるこ  
とができます。  
ペットも大きな媒体  
と考えられています。  
人間とペットは非常に  
密着した距離で生活し  
ているため咬まれたり  
引っ掻かれたり、また  
気づかずに排泄物(糞  
や尿)に触れた手を口  
にもっていったりして  
うつること  
とがあり  
ます。特  
に野外を  
自由に徘  
徊する野  
良ネコは  
多くの病  
原体を身  
につけて  
います。  
口の周り  
や傷口を  
なめられ  
てうつる  
場合や、  
個体の咳  
やくしゃ  
みを直接  
受けたり  
すること  
で感染す

る病気もあります。こ  
れを直接伝播と呼ん  
でいます。  
最近人気を呼んでい  
るイグアナ、ハリネズ  
ミ、エリマキトカゲな  
ど外国産のペットでは  
これまで知られていな  
い未知の感染症も含め  
どのような感染症をも  
っているかわからない  
ので特に注意が必要と  
いわれています。  
そして日本の場合で  
は、野生動物そのもの  
の増加を忘れてはいけ  
ません。シカ、イノシ  
シなどは人里に悠然と  
出てくるようになり、  
さらにサル、クマも出  
没するし、近年ではア  
ライグマ、ハクビシン  
など外来動物が野生化  
して激増しています。  
実際、これらの動物  
がシビルやノミ、ダニ  
などを人里に運んでい  
る例は多く報告されて  
います。マダニから感  
染する重症熱性血小板  
減少症候群は極めて致  
死率の高い危険な病気  
ほかに日本紅斑熱な  
ど多々あります。また  
アライグマは、日本で  
はほとんど消えたはず  
の狂犬病を媒介すると  
言われています。  
世界中で新型コロナ

で大騒ぎしている最中。  
『狂犬病お前もか』。  
愛知県豊橋市は5月  
22日狂犬病発症確認し  
たと発表。日本での症  
例は2006年2例、  
以来14年ぶりです。い  
ずれも患者はフィリピン  
人で、フィリピンで  
犬に咬まれ感染し日本  
で発症したとみられて  
います。先進国での発  
症事例は極めて少ない  
が、途上国においては  
感染は犬から90%以  
上。その他の主な動物  
は、ネコ、コウモリ、  
キツネ、アライグマ、  
スカンクなどから人に  
感染するもので、人か  
ら人には感染しないそ  
うですが、死亡率は高  
く、危険な感染症です。  
ワクチン接種が徹底  
している先進国での感  
染することはめったに  
ありませんが、途上国  
からの動物の輸入など  
からの動物の輸入など  
水際の防疫体制を再度  
見直す必要があります。  
料理のジビエも極め  
て危険な感染源です。  
すでにシカ肉からE型  
肝炎ウイルスに感染し  
た事例があります。  
ほかにサルモネラ菌や  
寄生虫、O157大腸  
菌も検出されています。  
食べる時には十分な加

熱が必要です。シカ刺  
しなどはもつてのほか  
です。自己責任で食べ  
を被ると言うことを理  
解する必要があります。  
環境が媒介となる感  
染症があります。  
病原体で汚染された水  
や土壌と接触したり、  
また、排泄された病原  
体が風で舞い上がった  
空気を吸い込むことで  
感染します。この感染  
の恐ろしさは、環境が  
病原体で汚染されてい  
ることには通常気づか  
ないことです。  
ダニ、蚊などが感染  
動物から人間への吸血  
によって日本脳炎・デ  
ング熱などの病原体を  
伝播します。これらの  
感染症を間接伝播とい

ています。  
コロナによ  
り今、感染症  
の恐怖が急に  
広がっている  
と感じる人が  
多いかもしれ  
ませんが、人  
類と感染症の  
関わりは歴史  
は古い。例え  
ば、エジプト  
のミイラから  
天然痘に感染  
した痕が確認  
されているよ  
うに、人類の  
誕生とともに  
感染症との闘  
いの歴史が始  
まったといっ  
ても過言では  
ないでしょう。新型コ  
ロナウイルスの感染源  
や、感染経路について  
は、いまだに明確な結  
論が出ていませんが、  
これらを突き止めるこ  
とが、先決で将来的な  
新種のウイルスの蔓延  
に対応していくうえで、  
役立つ重要なことにな  
ります。  
加えて、今回のよう  
に世界的大流行に繋がっ  
た人間の活動や行動を  
特定し、検証すること  
が将来の最善のウイル  
ス対応策に繋がります。  
今後は衛生対策の徹  
底を図り、恐れるべき  
ものは正しく恐れ、そ  
うでないものを不必要  
に恐れることはやめ、  
感染症と闘いながら共  
存して行く以外の道は

ありません。  
新型コロナとほぼ時  
を同じくして始まった  
「コロナに続くもう一  
つの危機」といわれて  
いる蝗害(こうがい)  
が今、東アフリカを襲  
い数千万人の食料供給  
が脅かされています。  
かつて日本にも蝗害  
のあった記録が残って  
います。1879(明  
治12)年に始まり、数  
年間続いた北海道・十  
勝平野のトノサマバッ  
タの大発生です。ある  
年の場合、大群は札幌  
など石狩地方にまで広  
がり、バッタの大群が  
空を覆い、作物を食い  
尽くす様子は「日蝕の  
ように太陽が陰った」  
「住民たちはただ茫然  
として惨状を見守るば  
かりであった」(帯広  
市史)などと伝えられ  
ています。災害と言え  
ば、大雨や台風、旱魃  
などが想像されますが、  
虫の大量発生もその一  
つで自然災害なのです。  
蝗害は日本ではあまり  
見られない現象ですが、  
中国では、大規模な大  
雨や旱魃が起こると必  
ずといっていいほど発  
生することから、蝗害  
を天災の一つに数え蝗  
災と呼んでいます。  
今起こっている蝗害も  
アフリカの乾燥地帯に  
大雨が降ったために、  
植物が増えたことが原  
因ではないかと言われ  
ています。

日本は島国であると  
共に気候などの問題か  
ら、サバクトビバッタ  
が日本にまで飛来して  
くる可能性は限りなく  
低いかもしれません。  
だが、無いとは言いき  
りません。私は決して、  
危機感を煽るつもりで  
はありませんが、自然  
は何かのきっかけで突  
然牙をむくことがある  
ということだけは胸に  
とどめておいて下さい。  
日本では、病虫害で  
毎年1億トン以上の食  
料が被害を受けている  
といわれています。  
日本では食料の63%  
を他国に頼っています  
が、食料だけは自給自  
足の体制を整えておき  
たいものです。  
未来に、これ以上の  
禍根を残さないために  
は、長期的に全世界が  
化石燃料の使用量を減  
らし、気候変動の問題  
に取り組み以外の道は  
ありません。地球の温  
度上昇を押さえ込むこ  
とにより、さまざまな  
感染症を含む大規模災  
害を回避することがで  
きるのです。  
気候変動と感染症に  
ついては以前より言わ  
れていましたが、今回  
改めて温暖化の問題を  
認識させられました。  
地球温暖化は、私た  
ちに様々な影響を与え  
ています。多くの動植  
物をはじめ、環境や生  
態系などが被害を受け  
ているのは「存じだ



地球温暖化で苦しむのは人間ばかり  
ではありません。南極に棲む動  
物たちも危機に瀕しています。  
写真＝WWFジャパンHPより引用

# イノシシを知ろう

イノシシによる農林被害を効果的に防ぐためには、イノシシの生態や行動を詳しく理解し、共存するための総合的な対策を練る必要があります。

日本に生息するイノシシは、本州・四国・九州に広く分布するニホンイノシシと、奄美大島から南のエリアや沖縄に分布するリュウ

キウウイノシシの2つの亜種に分類されます。他に、豚とイノシシの交配によって生まれたイノブタという雑種は日本中に広く生息しています。

《食べ物》は、雑食性で基本的には何でも食べます。ドングリや栗、キノコなど比較的消化の良い柔らかいものを好みます。地中の芋やタケノコ、ワラビなども掘って食べます。

また、サツマイモを掘り集め、カヤをかぶせて貯蔵したりすることもあるそうです。農作物の被害として多いのは、稲やサツマイモ、豆類、サトウキビなどです。一晩で稲が全滅された事例も多く報告されています。

《身体能力》  
体の大きさや構造は、体重は成獣で60kg〜100kg程度です。厚い毛皮に覆われており、硬いとげなどが体に当たってもそれほど痛みを感じないほどで、痛みを感じるのは鼻先のみといわれています。電柵設置時には、配線高さに考慮が必要です。

走る速さは、時速45kmで走る事も可能といわれています。猟犬でも追いつけないことがあるほどの走力があります。猪突猛進という言葉にあるような直進しかできないというイメージは誤りで、急停止や急発進、急な方向転換もできます。

力の強さは、鼻先で70kgの物を持ち上げる力があります。突進力も強く、その攻撃は同じ体重の人間の攻撃よりも何倍も速いといわれます。大人の人間でも跳ね飛ばされて大けがを負う危険があるほどです。

《生育や寿命》  
イノシシの繁殖期は12月から1月にかけて始まり、約3ヶ月間続きます。繁殖期のオスは発情期特有の臭いを出し、食欲を減らして痩せながらも、メスを捜して活発に徘徊します。この時期のオスの肉は、かなり臭みがあるといわれています。

地球温暖化を防止することは世界人類共通の義務であり課題です。次世代のために、もこれ以上の禍根を残すことは許されません。

近年、カボチャ・スイカが推奨されています。立体栽培では、栽培面積を大幅に縮小でき、収量も平作りと同程度で、獣害対策を施した小規模圃場では圃場の有効活用が望まれます。



写真①は「ヒゲおやじの気ままな流野菜づくり日記」HPより引用。カボチャの立体1栽培始めた私の畑です。

## カボチャ・スイカ 立体栽培

近年、カボチャ・スイカなど蔓物の立体栽培が推奨されています。立体栽培では、栽培面積を大幅に縮小でき、収量も平作りと同程度で、獣害対策を施した小規模圃場では圃場の有効活用が望まれます。

平作りでよくあることですが、防護柵外に茎葉が伸長・着果し、野生獣を誘引することなども防げます。

また、立体栽培を行うことができれば、栽培面積の縮小が可能になり、野生鳥獣から守りやすい栽培が出来ます。加えて、食害防除においても防護ネットを支柱全体に覆うことで比較的簡単になります。

立体栽培の支柱などは除去せず、常設することで、支柱の除去や再設置の労力を削減することが出来ます。

カボチャ・スイカは結実すると支柱全体に相当な重量が掛かりますので、これに耐えられる構造が必要。摘果をし無駄な結果避けることが重要になります。

他にも、放置されている柿や桃などの果樹を、低木に仕立て管理や収穫を容易にすることが出来る栽培方法もあります。防護柵で囲みやすく、高いところに上る習性のあるサルにとっては、侵入や逃走経路になりにくいなどのメリットがあります。

カボチャ・スイカは結実すると支柱全体に相当な重量が掛かりますので、これに耐えられる構造が必要。摘果をし無駄な結果避けることが重要になります。

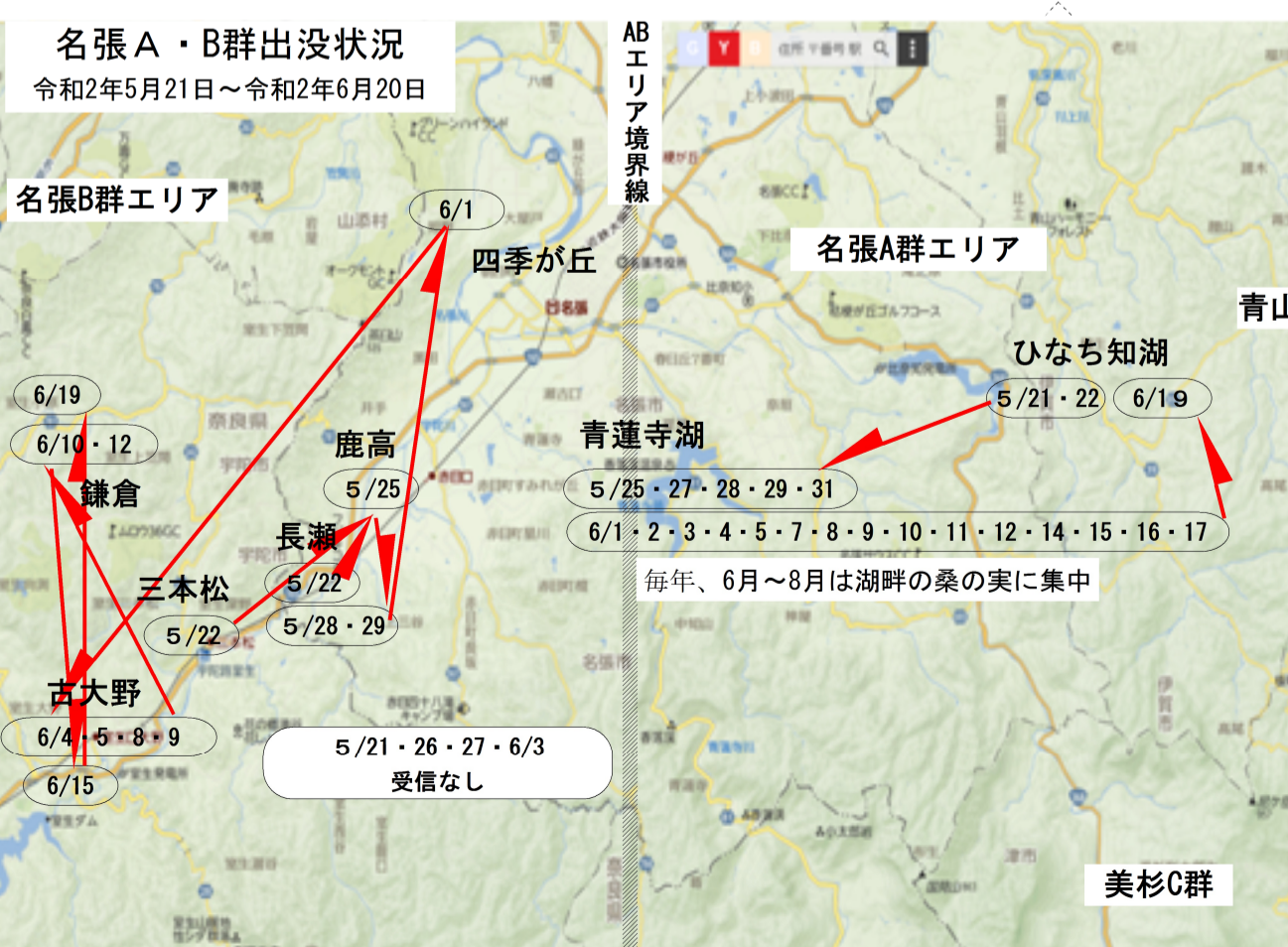
他にも、放置されている柿や桃などの果樹を、低木に仕立て管理や収穫を容易にすることが出来る栽培方法もあります。防護柵で囲みやすく、高いところに上る習性のあるサルにとっては、侵入や逃走経路になりにくいなどのメリットがあります。

取り戻すのは時間の問題と思われず。最近、受信不能で所在が確認できない日が多くなっています。「弱く間隔の短い受信音」など発信器の故障などが考えられます。名張市農林資源室では、地域住民に目撃情報を求めています。ご協力のほど宜しくお願いします。

Tel 0595 63 1725

## アフリカ 東アフリカ蝗害

新型コロナウイルス感染症拡大で世界中で死者が43万人を越え、深刻化が拡大している中、もう一つの脅威が東アフリカを中心に発生している。それは、サバクトビバッタによる蝗害で、国連食糧農業機構（FAO）によると農作物被害は、ケニア、エチオピア、ソマリア3カ国で1,000万人を超す人が深刻な食糧危機に直面しているという。被害はアラビア半島や南西アジアなど広範囲に広がった。サバクトビバッタの発生は1000億〜2000億といわれ40kmに渡り発生し100万人分の食料を食い尽くすといわれている。サバクトビバッタの異常発生は地球温暖化温暖化示唆されていて、異常気象による大雨がサバクトビバッタの大発生要因になっているといわれています。パキスタンでは、軍隊が出動し殺虫剤の空中散布を実施しているが人体への健康被害が心配されている。多くの食料を外国に依存している日本にとっては決して対岸の火事ではない。文・田村 修市



## サル出没状況

A群は、5月25日頃から青蓮寺湖、湖畔に入りその後、ほとんど動いていません。湖畔には桑の木が数本ありその実に集中して食べて暮らしています。1本の木が熟成して食べ終えても別の木々が熟成します。順番に回ればいつも熟成した実が食べられます。

この様に季節的に実のなる樹木を人為的に各地域に植栽するのも獣害対策の一つの方法ではないでしょうか。

B群は、安部田の四季が丘近辺まで遊動域を拡大しています。大量捕獲前の遊動域を